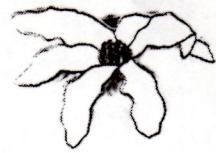
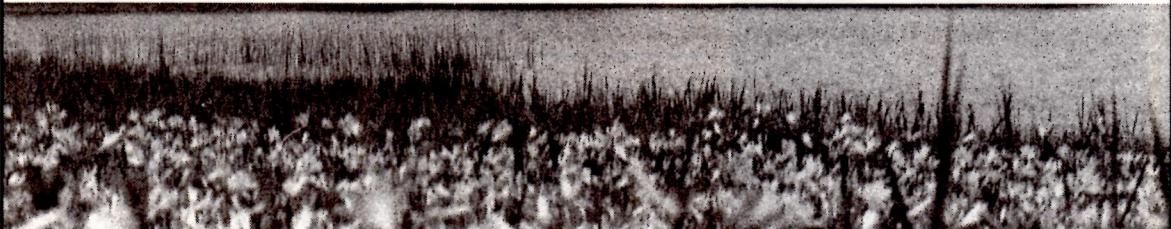


尾瀬の自然



(題字 初代環境庁長官 大石武一氏)



■ 野性植物の危機



尾瀬冬季利用状況(山ノ鼻地区、撮影・梅山久夫)

尾瀬の自然を守る会

野性植物の危機

東京大学教授 岩槻 邦男



■去る二月三日、東京農大一高生物教室において、尾瀬の自然を守る会総会が開かれ、その際に岩槻先生に特別講演をお願いした。本稿は、その講演の要旨（文責・編集部）

■当日は、約五十名の会員が集まり、熱心に話を聞いた。尾瀬まで話が及ばなかつたが、会員の質問に応えて先生から送られてきた資料には、尾瀬に関係のあるナガバノモウセンゴケ、オゼソウ、カトウハコベ、シブツアサツキなどが絶滅危急種として挙げられて

■参考文献
「日本絶滅危惧植物」岩槻邦男著（海鳴社一九九〇年刊）
「減びゆく植物を救う科学」ムニンノボタンを小笠原に復元する試み 岩槻邦男、下園文雄著（研成社一九八九年刊）

■絶滅危急種とは、今すぐ危ないと、いうのではないが、そのまま放置すれば、やがて絶滅危惧種に移行すると推定されるもの。種は極めて強い外圧の影響を受けており、安全性が保証されない。

尾瀬まで話が及ばなかつたが、会員の質問に応えて先生から送られてきた資料には、尾瀬に関係のあるナガバノモウセンゴケ、オゼソウ、カトウハコベ、シブツアサツキなどが絶滅危急種として挙げられて

■参考文献
「日本絶滅危惧植物」岩槻邦男著（海鳴社一九九〇年刊）
「減びゆく植物を救う科学」ムニンノボタンを小笠原に復元する試み 岩槻邦男、下園文雄著（研成社一九八九年刊）

■絶滅危惧種とは、今すぐ危ないと、いうのではないが、そのまま放置すれば、やがて絶滅危惧種に移行すると推定されるもの。種は極めて強い外圧の影響を受けており、安全性が保証されない。

歐米と日本の状況

野性植物の危機という問題は、欧米では非常に古くからあります。たとえばアメリカでは「絶滅危惧種法」という法律ができたのは一九七三年のことです。この種が絶滅危惧種であるという認定は、

商務長官がすることになつてゐる。国が認定しますと、その絶滅危惧種に害を及ぼすような開発をするときには、そ

の開発をしていかかどかと

ききて、自然といふものを愛し大切にしてきた民族であると、日本の文芸が示してきていると思いますが、それにもかかわらず日本人が絶滅危惧種の問題に、なぜそんなに無関心であり続けてこられたのか、ということを申します

と、日本の場合には緑の保全というのが比較的楽にできてきているということがあります。

これは日本の温暖多雨の気候、複雑な地形が緑の維持には非常に恵まれた環境にある、

一たん緑が破壊されてしまつても、放たらかしにしても回復してくるわけです。たとえばアメリカで緑を破壊して綿畑にしますと、放つておいたのでは緑は回復してこない。

日本では、全体として緑が維持されているものですから、意識としてそれほど極端に絶滅危惧種の問題がひどいとは思わないで済んでいるわけですが、そのことは本に

日本はどうかといえば、日本では、そういう法律をつくるということは、全く絶望的なことです。

ヨーロッパでは、エジンバラ公を総裁にして、WWFといふ野性生物保護委員会ができた一九六〇年代から、国をあげて絶滅危惧種に取り組むという態勢ができあがつてい

ます。

数年前から日本でも自然保护協会野性生物基金の援助を受け、植物分類学会のメンバーを中心にして調査を始めたわけです。そのことは本に

も書いてありますが、十七ないし十八ヶ所が絶滅危惧種、つまり六種に一種が絶滅危惧種であることが、結果として判明したわけです。このまま放つておけば、やがて絶滅してしまうわけあります。

絶滅危惧種とは、過去五〇年の間再発見されていない、というものを絶滅種といふんです。日本では、どこに何本とわかっているものもあるので、必ずしも過去五〇年でなくとも絶滅種と認定しているものがあります。

絶滅危惧種というのは、非常に個体数が減つてしまつて、もはやその個体数では自然界で生存が維持できなくなつてしまつてゐるもので。たとえば、小笠原父島のムニンノボタンというものは、栽培種と違つて一人で生きていかなればいけない。たとえば、その生物の生活を維持する最

1991年4月10日

低限の温度より低い温度がくれば、栽培種は一斉に枯れてしまう。野性種の場合は、個体数がたくさんあって、ほとんどの個体は低温でやられてしまっても、それに強い変種が残るわけです。非常に広い幅の変異をもっているのが野性種の特性ですから、変異をもつ相当な個体数がなくてはならない。ですから、ムニンノボタンのように一本しかないといふことは、絶滅したのと同じことになるわけです。それから、次のランクで絶滅危急種というのには、いまの状態だったらまだ野性種として生存していくことができるけれども、どんどん減っていく、しかもその減つてくる条件が改善されない状態にあるのです。

それと絶滅危惧種か危急種種というのがあり、この四つが完全にされていないために、現状が不明だという現状不明のランクに属するものが日本のみで九〇〇種になります。

日本全体で野性種というのは、五千何百種です。ですから、六種に一種が危ないということです。この中には、サクラソウ、サギソウ、秋の七草の一つのフジバカマや紫式部の名前にもなったムラサキなど、私たちの身近な植物もあります。

回復の困難性

たった一本になってしまったムニンノボタンから、種を取つてたくさんのが育つて、父島で一本という状態からは脱出したが、自然環境の中でどう回復させるかがボイントです。遺伝的な性質はコピーミニンノボタンです。ササニシキやコシヒカリを植えるのと同じ状態です。これが野性種として回復したと言えます。それまでは栽培環境の人工的な管理が必要で、そのエネルギーとお金というのは相当大きい額になってしまふと思います。

絶滅に追いやりるのは簡単ですが、回復するのは非常に大きです。

御池駐車場におけるマイカー実態調査

一 調査目的

過剰利用が危ぐされている尾瀬の利用状況を知ること。

二 調査日時

第一回／七月二八日(土)

九：〇〇～一〇：〇〇

第二回／七月二九日(日)

一〇：四五～一一：二五

第三回／八月四日(土)

一〇：三〇～一〇：四五

第四回／八月一日(土)

九：〇〇～九：三〇

第五回／八月一二日(日)

一二：三〇～一三：〇〇

495台のマイカーが確認された。
(1) 各週末、特に土曜日のマイカー台数は、八月に入るとほぼ半減することが示された。

(2) 地域別

福島・新潟および栃木三県からのマイカーの占める割合が極めて高くほぼ50%以上であった。また、首都圏からのマイカーの割合も比較的高かった。

(3) 北は北海道、西は北陸や関西以西方面からのマイカーも多数確認され、尾瀬が全国の人々によつて利用されていることが確認された。

五 今後の課題

今回の予備調査の結果を踏まえ、今後も同様の調査を継続してゆくことが必要であると思われる。その際、尾瀬を訪れるマイカーを総合的に把握するために群馬・福島両入口での同時調査が有効となる。また、特定の時間帯の駐車台数を調査するに留らず、一定の期間内(特に週末)に訪れたマイカーの延台数をとらえることが重要となろう。

三 調査結果

各調査における駐車台数及び地域別割合は上表の通り。

四 まとめ

今回の調査で得られた知見は次の通りである。

(1) 夏休みに入って最初の週末には、御池駐車場の駐車スペース満杯に近い

水彩写生旅行

尾瀬日記 (12)

大下 藤次郎
(日本水彩画家)

尾瀬の自然を守る会
役員・幹事名簿
(91~92年)

七月二十一日 半晴

『小川』から『笈沼』迄三里ときいてゐたが、いくら行つても沼らしいものが見えぬ、道を違へたのかと思つて、山道でもこんな時間のかゝる筈はない、皆んなの時計が間違ふたのではないかとも思つた、此道程困つたことはない、今度の旅の中で一番難澁であつた。(愚)

『笈沼』に着いたのは三時頃である。途中、只小さな沼が一つ及び『白根』登山口と記した古い石と其傍に鳥居があつたばかり。



『笈沼』には一つの冷たい流が注いで居るので、こ

で辨當の残りを食ふ、糠の様な數知れぬ蟲が襲來したが『尾瀬』で修業をつんだ身には別に驚く程の事もなかつた。『金精峠』の最難所は愈々これからである。

笈沼は小さいが中々幽邃

でよい、沼の岸には少しのムーアランドがある、併し『尾瀬』を見た目には畫架を据へる氣になぬ、そしてそんな時間もない、もしこれが道の半分として、是れから『金精峠』にかかるとすると、今夜中に『湯本』へゆけるか、否もわからぬといふ、大事の場合である。(愚)

一里以上ときいた峠だから、二時間はかかるものと覺悟して、兎角休みたがるのを勇氣をつけて、只上りに上つたら忽ち頂上へ着いたので、アツケないやうな氣がしたが、併し實に嬉しくも思つた。

顧問	大石 武一
代表	門司 正三
事務局長	高野 均
総務部長	内海 広重
指導部長	児玉 芳郎
研究部長	坂井 崇浩
財政部長	河内 輝明
群馬代表幹事	波戸場 秀幸
群馬事務局幹事	長谷川 義孝
福島事務局幹事	青木 安弘
会計	平井 敬治
会計監査	梅山 久夫
総務部幹事	清野 共子
会計	松田 美代子
研究部幹事	岸 仁
指導部幹事	武 勝
研究部幹事	飯塚 忠志
指導部幹事	狩谷 保
有馬 進一	古見 滉雄
横山 隆一	八木 幸一
町田 八木	阿部 幸一
早川 德光	秀利
大中 瞳夫	恵子 秀則

七月二十二日 曇、雨

是まで幾度見てもよいと思つた『戰場ヶ原』は、まことに詰らぬものになつて仕舞つた。『尾瀬ヶ原』は其原の盡くる處が見遁されなかつたが、こゝは直ぐ山の麓迄よく見える、『尾瀬』には美しい花草のはか石一つないが、こゝには原の中に熊笹もあれば雑木もある。

『湯瀧』の下で一もとの車百合を得た、根を水苔で包んで大切にして持つて來た、どうかこのまゝ『東京』迄と心に念じつゝ。ついこの間來て見たばかりだが『華嚴』はやはり壯大である、『大平』邊の白樺は見るに耐へぬ、そして此邊に啼く鶯の聲はとても『尾瀬』山中の嬌音と比較にならぬ、あゝ下界へと段々近づいた哩と大に心細くなつた。(鷗)

數年前遭難の當時のことなど考へつゝ雨の中を停車場へと急いだ、『日光』の町近くになると 俗な色がチラ～見えて来る、折角神聖になつた 眼を汚されるやうな氣がしてならぬ。

『尾瀬』の色には嬌めかしいものがない、紅い色でも、紫の花でも、何でも實に氣高い色彩を呈してゐる、小指程の小枝にも薄緑の苔が着いてある、たゞ～赤い草の質があれば、恰も珊瑚のそれのやうに高尚な光りを持つてゐる、色彩の研究としても『尾瀬』は實に得易からざる處である、然るに下界へ來ると、忽ち藝者の紅い袴が見える、俗惡な彩色をした看板が目にに入る、駒鳥や鶯の音に清められた耳は、忽ち輕薄な人間の言葉を聽かされる、寂ろこゝから再び『尾瀬』へ引返そうかとさへ思つた。(鷗)

『東京』へ着いて人間の多いのに驚いた。電車は滿員、折角『日光』でとつて來た車百合の花を損ふまいとの心配は一通りではなかつた。十一日目で吾家へ歸つて、草鞋をとき湯に入り、さて居間の座布團の上に腰を下したが、何だか半年も旅行してゐたかのやうに感せられた。(鷗) (四一、七)

編集部幹事

牛木 一郎
上野 号史

竹井 斎
奥平 貞昌

波戸場秀幸
高橋 齋

(兼任)
(新任)
八卷 治子
石井良太郎
椎名 宏子

生方 欣司
荻野 保夫
高井 昭
町田 安正
林 ふさ子
竹田 誠二
峰巣 隆雄
松村 幸雄
山田 鈴一
齊藤 邦夫
星 和由

財務部幹事
一般幹事

■ 連載の終了
「水彩写生旅行」の連載は本号で終わり。大下藤次郎(一八七〇—一九一)は夜明けを迎へつた尾瀬の、その夜明けを一層明るく華やかに人々に示した、尾瀬の歴史上欠かすことのできない人物である。次の連載として武田久吉の「尾瀬紀行」を検討中である。

(以上47名)

■ 特集 ▼ 続会員の声 ▼

会報54号で募集した「私と尾瀬」の原稿は、三點集まりました。前号の会員の声欄で「五〇年入山禁止を」を書いた清野英一氏と次に掲げる二氏です。会の運動20周年記念出版が、リベルタ出版KKの田恒雄氏の努力にかかわらず、当会の力量不足により成案を見ず、宙に浮く形になつたこれらの方々の原稿をとりあえず本誌に掲載するものです。

(編集部)

尾瀬と私



ハウチワカエデ

松田美代子（東京都）

尾瀬との付き合いは五十年になりました。その頃知る人ぞ知る尾瀬は交通が不便のため余程の人でなければ入れませんでした。

昭和十六年に初めてバスが戸倉まで入ったのです。然しその後戦争勃発でバスは又後退したそうです。

三平下の尾瀬沼に到着して、白砂の浜で休んだ時、美しい神秘に満ちた世界に驚きました。

リーダーのK氏と私と妹はその年の七月半ばに計画を立てたので非常に幸運でした。

宿にはお婆さんが四十五才の男の子のお孫さんと一緒にいました。お婆さんは私達を見て嬉しかった。

自分的人生の中で尾瀬を避けて通る事は出来ません。その中で多くの方々との出逢い

た。山の中の海岸のよう、否、どこの海岸にも石英の砂なんて有り得ない。

私達三人は長蔵小屋に一泊し、翌朝橋の無い大江川を飛び越えて燧岳の裾を尾瀬ヶ原に向って歩き、林道の途中から三丈（今は条）の滝と平滑の滝に入ったのです。

尾瀬ヶ原には一筋の踏み跡が道になつていて、牛首のあたりはぬかるみに太モモまで入る始末。日は暮れ、心細くなつた頃遠くに灯が見えて来ました。リーダーが「山の鼻小屋だ」と云つたので涙が出来る程嬉しかった。

宿にはお婆さんが四十五才の男の子のお孫さんと一緒にいました。お婆さんは私達を見て嬉しかった。

自分的人生の中で尾瀬を避けて通る事は出来ません。その中で多くの方々との出逢い



ムシカリ

私と尾瀬

牛木一朗（東京都）

後に父は私に「世の中が落ち着いたら喜久代の写真を連れていって来なさい」と。昭和三十八年に夫を亡くした私は尾瀬を心の寄り所にのめり込んでしまったのです。

昭和四十六年に尾瀬の自然を守る会が誕生し、発会式から現在まで会の仕事を手伝つてきました。

自分の人生の中で尾瀬を避けて通る事は出来ません。その中で多くの方々との出逢い

びっくりして「女人がどうやってここまで来たのですか」と尋ねた。宿には先客が二三人居た。戸倉から歩きはじめて人に逢つたのは初めてでした。こんな思い出があつてから、戦争と共に食糧もきびしくなり、リュックザックは買い出しのザックに代り、夢も希望もなく爆音に逃げ迷う日々でした。私の家は奇跡的に一角に残りましたが、妹は結核にかかりました。終戦後悲しくも他界しました。

妹は病床で私に言つたのです。「もう一度尾瀬に行かなれば死んでも死にきれない」と。

後に父は私に「世の中が落ち着いたら喜久代の写真を連れて尾瀬に行って来なさい」と。

尾瀬とは不思議な魅力を持った所である。他の地域を旅しても、それなりに良さを感じるもの、やはり、尾瀬は素晴らしい。また訪れたいと思ってしまう。多くの高山植物が咲き乱れる湿原、満々と水を湛える地塘、四方を囲む森林さらには燧ヶ岳の威影と花の名山至仏山、あえて言うならば、自然の胎内に抱かれているようなと言うところだろうか。私もどうやら尾瀬病になりつつあるらしい。

その尾瀬も環境が蝕まれ危機にあり、次代に残すために難問が多い。私達の活動もその地域に根ざしたもののが望ましい姿だと思いますが、現地の人々とは立場・意見の相違があり、私たちとは噛み合わぬものとなっているのが現状で誠に残念でなりません。

ことに都会の人間というと、たまにしか来ないで現地の苦労を解らず、勝手な事を言うなど思われているだろう。多くの都会人が好き勝手に遊びにきて、環境を害して行くと現実がある以上やむを得ないことかも知れない。

数年前の六月、東京の九段会館で山岳映画の会が開催され、尾瀬・松枝岐を題材にし

1991年4月10日

た映画が上映された関係で、尾瀬のある山小屋の主人が挨拶したが、ミズバショウとニッコウキスゲの開花時の中間期にも、客を呼びこもうと尾瀬の宣伝に終始していた。現地の山小屋の主人が自然保護を啓蒙する話をしてくれれば、どれ程説得力があるか解らない。大観衆を目の前にして何とも割り切れない思いとともに残念でならなかつた。

東京都区内に二ヶ所特筆すべき場所がある。一つは明治神宮の森で、人工の森と軽くあしらわれがちだが、その成因は明治天皇の御陵が京都だった為、東京にも記念するものとてう民間の声から始まり、当時の内務大臣は伊勢神宮や日光山内の様な莊厳な感じの杉林にせよとの意向であつたが、造園を担当していた東大などの学者達は、この環境はスギには適さない、永く残すにはかつてあつたであろう雑木林を復元するような形が望ましいと反対し、人工の感じを与えない工夫として植え。高さも太さも不揃いにする。第二に樹林の天然更新によって世代交替を計り、

た映画が上映された関係で、尾瀬のある山小屋の主人が挨拶したが、ミズバショウとニッコウキスゲの開花時の中間期にも、客を呼びこもうと尾瀬の宣伝に終始していた。現地の山小屋の主人が自然保護を啓蒙する話をしてくれれば、

森の生命を永遠に持続させる。人工の森とは思えないはずである。

もう一つは東京港野鳥公園で、放置されていた埋立地に、いつの間にか草が生え、雨水がたまり池となり、そこに野鳥が集まつてくるようになつた。やがて愛好家達が観察会を開き、それが自然公園づくり運動へと発展し、粘り強い行動と都の理解により、今日ある公園が出来たのである。

野鳥のための公園という基本理念から、入場できるのも一部で観察舎以外は特別な施設はなく、邪魔しないように野鳥を見させていたくといふ感じである。この二ヶ所は市民の声がなかつたら存在しなかつただろうと思うと、驚きと価値を改めて感じる。

日本の自然、特に豊富な植物相は、地球的に見ても氷河の直撃を受けなかつたためにできたもので、そのなかで湿原という特殊な自然は価値が高く貴重である。日本人共通の財産として、尾瀬に関係する人々が同じテーブルの上で立場を越えて協議できることを切に願つてやまない。

尾瀬の自然を守る会 1991年スケジュール

右側太字名前は、担当者

参加者は、早めに担当者へ連絡をとって下さい。

● 4月28日(日)	冬季利用実態調査(尾瀬沼)	梅山 久夫	0272-24-4645
● 6月2日(日)~3日(月)	観察会①(尾瀬沼周辺)	清野 共子	0245-34-7808
● 6月21日(金)~23日(日)	前期指導員養成講座(尾瀬ヶ原、宿泊は戸倉)	石井 良太郎	0434-23-7081
● 7月7日(日)~8日(月)	観察会②(至仏山)	波戸場 秀幸	0273-23-9302
● 7月13日(土)~15日(月)	指導員研修会(大雪山国立公園を訪ねる)	坂井 崇浩	03-3447-1877
● 7月21日(日)~23日(火)	尾瀬入山指導(戸倉、松枝岐)	福島 清野共子	0245-34-7808
		群馬 平井敬治	0279-56-2249
		東京 岸 好人	03-3704-2393
● 7月下旬~8月上旬	全修協入山指導		
● 8月16日(金)~18日(日)	後期指導員養成講座(尾瀬沼・宿泊は松枝岐)	石井 良太郎	0434-23-7081
● 9月8日(日)~9日(月)	観察会③(アヤメ平、尾瀬ヶ原)		
● 10月	観察会④(小渕沢田代)		
● 12月上旬	公開講座・20周年記念フォーラム		
月例観察会		武 繁春	045-752-0083

= ミズバショウシーズンに各自フリーな形で入山者指導(バス添乗にはこだわらない) =

国道401号交通不能区間 解消請願(群馬・福島)

国道401号線といえば、大清水々三平峠々尾瀬沼々沼山峠を経る旧名を沼田会津街道と呼んだ歴史のある道のことです。一九八一年一月一日に国道に昇格。昨年末、国や県の予算編成時期に毎年請願が繰り返えされていることがわかつた。

一つは「会津若松・沼田間401号線国道路格延長整備促進期成同盟会」(群馬県利根沼田の9市町村と福島県会津通り10市町村の首長・議長で構成、会長・渡部恒三)が「国道401号の車両交通不能箇所(群馬県片品村から福島県松枝岐村間約24km)の解消についての陳情」という項目を含んだ陳情書を建設省などへ提出した。もう一つは「国道401号片品村(福島県松枝岐村間の交通不能区間の解消と整備)」という項目を含んだ利根地方総合開発協会(群馬県利根沼田の1市2町6村で構成、会長・沼田市長)が県議会に提出した「主要道路等の整備拡充促進についての請願」で、土木常任委員会を通して12月議会で陳情採択。(波戸場)

尾瀬冬季利用実態調査

この冬季利用実態調査は、尾瀬の冬期利用は問題はないのか、その利用の実態はどうなつか、が主要テーマです。こ

とは尾瀬沼地域を重点的に調べます。振るつて参加して下さい。

とき 4月28日(日)

コース 大清水一三平峠一尾瀬沼を往復します。

集合 28日(日)大清水のバス停前に、午前七時。

募集人員 10名(受付順)

申込締切 4月19日(金)

携帯品 冬山ですので、アノ

ラック、長靴、手袋、サン

グラスなど。

申込先 梅山久夫(前橋)

電話 0272-24-4645

指導員研修会

大雪山国立公園を訪ねる

とき 7月13日(土)～15日(月)

内訳 一泊三日

参加費用 約六五、〇〇〇円

内訳 航空運賃、現地交通費、講師謝礼、保険、入館料、入浴料等。

宿泊 黒岳石室 二泊

コース 13日羽田空港一旭川空港一バスで層雲峠(博物館見学)一ロープウェイ等で黒岳七合目一登山三時間で黒岳石室(泊)

室一北海岳一白雲岳一黒岳石室(泊)

15日石室一北

鎮岳一中の岳一裾合平一姿見一ロープウェイで旭岳温泉(入浴)一旭川空港

携行品 黒岳石室での食事を含めて、行程中の食事は各自分が用意。素泊りの貸毛布ン(四本歯)やスペツシ要。

申込締切 5月20日

申込先 坂井宗浩

月例観察会

とき 4月21日(日)

集合 京王線高尾山口駅 10時集合、昼食持参。

とき 5月19日(日)

集合 野川公園自然観察センターに13時集合。(JR三鷹駅南口からバス15分、野川公園入口下車)

とき 6月9日(日)

集合 柿田川公園第一展望台 13時集合。(JR三島駅南口からバス15分、西玉川下車)

観察会②の実施

とき 7月7日(日)～8日(月)

ところ 至仏山の花

募集人員 20名(先着順)

参加費 八、〇〇〇円 (宿泊費他)

未会員は、八、五〇〇円

詳細は、左記へ。

申込連絡先 波戸場秀幸

電話 0273(23)9302

申込連絡先 高崎市江木町一六五

電話 0273(23)9302

申込連絡先 松田美代子

電話 03(3228)0473

申込連絡先 高崎市江木町一六五

電話 03(3228)0473

申込連絡先 尾瀬の自然を守る会

電話 03(3415)2991

申込連絡先 総務(発送手伝い、他一般)

電話 03(3415)2991

申込連絡先 坂井崇浩

電話 03(3447)1877

申込連絡先 高輪台マンショングループ

電話 03(3447)1877

申込連絡先 青木安弘

電話 03(3415)2991

申込連絡先 会報最終頁に、2色刷の広告欄をつくるうと思います。

申込連絡先 頁を10分割して、一コマ二万円とし、2号連続掲載とする。

申込連絡先 従つて最低料金は四万円となります。心当たりのある方は、御紹介下さい。

会の主な連絡先

会計、総務、編集の三部所について

については、連絡先等を次に掲げますので、積極的な会への参加をお願いいたします。

会計(入会手続、会費納入)

松田美代子

中野区野方一四九一四

電話 03(3228)0473

郵便振替 東京6-138023

尾瀬の自然を守る会

総務(発送手伝い、他一般)

坂井崇浩

港区高輪二一一一一

高輪台マンショングループ

電話 03(3447)1877

編集(原稿、意見、広告等)

青木安弘

世田谷区大蔵二の二一三一

電話 03(3415)2991

会報最終頁に、2色刷の広告欄をつくるうと思います。

頁を10分割して、一コマ二万

円とし、2号連続掲載とする。

従つて最低料金は四万円とな

ります。心当たりのある方は、

御紹介下さい。

観察会①の実施

初夏の尾瀬沼

とき 6月2日(日)～3日(月)

集合 桧枝岐「つばめや」

2日の午後四時(チョックイン)

費用 八、〇〇〇円(宿泊代込)

申込先 清野共子

電話 0245-34-7808

広告の欄

湿性植物の花園を歩く

とき 6月9日(日)

集合 柿田川公園第一展望台

13時集合。(JR三島駅南

口からバス15分、西玉川下

車)

テーマ ミシマバイカモ咲く
一二〇万トンの湧水帯を歩く

15時解散。

尾瀬の自然 第56号

発行 会報最終頁に、2色刷の広告欄をつくるうと思います。

発行日 一九九一年四月十日

発行者 内海広重

編集者 青木安弘

事務局 東京都世田谷区桜三一三十三一

東京農業大学第一高

等学校生物教室 内43